

養老川流域の歴史散歩

— 神代台地から海上地域の歴史を覗く —

平成24年9月9日
総の国をかたる会
白鳥 元治

1. はじめに

今富・宮原北側方面の柳原・十五沢・小折・西野にかけての集落は、古養老川が築いた標高7～10メートルの自然堤防地域(沖積微高地)にある。さらに南東に延びて、権現堂集落が存在する。この自然堤防上に、古代から中世にかけての遺跡が発見されている。現在の養老川は、この微高地に沿って流れており川の対岸は、国分寺台地で、有史以前から古代・中世に至る遺跡の宝庫である。一方、公地整理された広々とした水田地帯を挟んで、南の台地上には宮原・神代・引田・分目といった集落がある。地元ではこの広大な水田を、通称「千石耕地」と呼んできた。台地上から眼下に広がって眺められ、海上小学校の校歌にも唄われている。古代の「海上」という名称は、かろうじて学校名として残った。

「千石耕地」というこの地域空間は、その昔沼沢地で湿地が複雑に入り込んでいたようである。一旦大雨でも続けば、養老川は氾濫して広大な池になったと容易に想像できる。全体の地形からいって、貯水池の役割を果たしていたにちがいない。今も溢れた水が自然に、河と行き来したと想われる流路跡がある。現在の千石耕地には、用水路が廻って柳原揚水機場に繋がり養老川へと接続している。

原稿を書きながら、古養老川の「川」を「河」と表記することにした。読者が、今の養老川のイメージでは困るからである。この海上地域の古養老河と水運が、郡衙として古代地方政治の拠点となり、中世の戦乱の中でも他地域とは異なる一つの文化・生活圏を築いたと想われる。その痕跡を取り上げて話題にしたい。

郷土史を考える上には、常に傍らに地方地図でも置いておくとよい。

2. 海上郡衙と古養老河

養老川の自然堤防上にある現地名「小折」は、明治時代から海上郡衙地に推定されてきた。国府に国司が朝廷から派遣されたのに対して、郡衙の役人である郡司は、地方の豪族が任用された。それは、上海上国造の後裔たちである。大和朝廷が地方を統率・支配するために、地方豪族のこれまでの支配力を取り込み、律令国家の体制を創り上げた姿が見えてくる。市原郡誌に「大日本地名辞書に云う、小折は郡の訛にして古郡家の地」とある。大日本地名辞書とは、1900年に刊行された古代から現代に至る地名の来歴を示すもので当時早稲田大学の教授であった吉田東悟によるものであ

った。郷土史家の小熊吉蔵も研究成果の中で、「小折」は宛宇と解し、「郡家のあった所なので郡(コオリ)といったが、後年郡の原義を忘れて単にコオリと発音したことから～」といったことを指摘している。「小熊吉蔵」氏とは、千葉師範卒・君津郡内で教師をしていた人物である。平成9年～平成15年にわたる広範囲な圃場整備に先行して、現在の小折と隣接する西野の一部の発掘調査で、奈良・平安時代にかけての掘立柱建築・井戸跡・溝跡で構成された施設は、一般集落とは違った様相であり、正倉ではないかという見方のできる倉庫建築が検出された。小折からはずれている地なので、その一部かもしれないともしている。西野遺跡という。

古代の養老河は、町田から島野方面へ向かって流れていた。現在は用水路のように幅狭く、前川と称している。そういえば東海小学校近くに、「下河原」というバス停があったことを思い出した。ここのバス停は、**下川原ではなく下河原**という表記であった。また村上地区の国府小学校前は、国道297号のバイパスがあるが、それにそった田圃の小字名に、「下川・川原・谷堀・下川田・中川田」と続く。このことは古養老河の流路を物語っている。館山自動車道の建設に伴って、村上の白旗神社付近で県文化財センターの発掘調査がおこなわれた。こでも多数の掘立柱建築跡・井戸跡・溝跡等が出土したが、ここは養老旧河道に面することから、一般集落跡とは違う公的施設跡としている。「国府津」という小字名があることから、「津」からここは、船場であったにちがいない。「国府津」は、何かを暗示しているようでもある。過去に村上付近は、上総国府の推定地の一つではあった。「万葉集 第十四集 作者不詳」にあるように、都人は海上潟より入り江となっている養老河を遡り、国府津あたりから上陸したのか、郡衙のあった小折から国分寺から国府方面へと向かったにちがいない。

海上潟近くの嶋穴神社を取巻いて、古養老河の痕跡が存在している。「飯沼」という地名は、もともと「入り沼」であろうか。現嶋穴神社参道前に、椎津方面からの官道があったと推定されている。和名類聚抄に、**嶋名駅**とある。古代道路は現五所へと北上し、五所小学校現敷地内から条里制跡の中を通り、台地上先端の**阿須波神社**の脇を登り国府へと向かったであろうと考えられている。官道は、中央政府である朝廷による国府への伝達と国府からの報告、役人や軍団の移動や租税の輸送目的であり、伝馬制を取り入れていた。それ以前の官道がない頃、国造時代からの一方のルートはどうであったろうか。海上潟から、ときには舟に乗り変えたりもして、養老河を遡っていったにちがいない。「東海」という地名が、大きな入り江であったことを想わせるのだ。郡寺(上海上一族の氏寺)である今富廃寺の五重塔や国分寺を凌いだといわれる大伽藍は、舟上からよく眺められた位置になるはずである。上総国分寺は、郡衙「小折」の対岸の台地上建立された。ここから国分寺と国府を繋ぐ古道は、当然あったはずであ

る。

3. 海上国造の郡寺—今富廃寺

今富地区は、養老河自然堤防の沖積平地の西方になる。東海中学校グラウンド側の田圃の中で、葦で覆われている土壇状の一面が、今富廃寺跡である。市原郡誌では、「建長寺旧跡」とあるが、今富廃寺と言ったほうが通りがよい。また「坊ヶ谷」という所にあり、かつて鎌倉建長寺より分かれた寺であったこと、そこから布目瓦が出土したことを紹介している。そしていつの時代か分からないが、かつては荘厳な七堂伽藍をもった寺院であったことが、人々の間で語り継がれ信じられてきた。さらに市原郡誌では、「～其荘厳遙かに国分寺を凌駕せしと云ふ、坊ヶ崎の北に塔ヶ崎と称する所があり、此れ其の名を示す如く、建長寺に付属せし、五重塔の転倒して、其の先の届きしを以って此の名を付せしと云ふ～」とある。土地の古老たちの話によると、昔は田圃や畑からやたらと瓦が出てきたので、川岸に捨てたり畦道の敷石として使ったりしたという。個人でも所有していた人もいたようだが、今は散逸してしまったという。まだ世間が遺跡というものに、関心もなくその価値も評価しない時代だったのだ。

1980年頃の上総国分寺等の発掘調査より、出土した瓦を中心とした研究から今富廃寺の瓦にも及び、7世紀後半に市原で初めて建てられた寺院であると断定した。駅伝制による官道と並んで、都からやってきた人々は海上潟から舟で養老河を上り、国分寺や国府を目指した別のルートであったにちがいないと考えたりしている。左岸の古墳群を目に入れながら、郡衙の入り口にあたる今富の荘厳な五重塔と、七堂伽藍を見上げながらヒ陸地に向かったのであろうか。姉崎から海保にかけての古墳群が象徴するように、かつてこの地の首長であった海上国造として、その権威を見せたにちがいない。何の史実として言えない歴史空間であるが、研究発表の主張でもないのでこのことは、想像としていっても許されてよいであろう。この海上地域はこの時代、政治的にも文化的にも古代における一つの世界を形成していたにちがいない。

海上地域の集落の位置関係と古養老河流路
 (市原市文化財センター年報 平成5年度より転用)



今富廟寺跡



町田の用水路(古養老河跡・前川)



町田～高速道路の前川

4. 養老川左岸台地 —神代台地から—

(1)神代台地の概要

姉崎の台地から、東方・養老川上流の奥へと向かって丘陵が延びている。開析された多くの支谷に挟まれて、北の方へと突き出した舌状台地をつくり神代台地に至る。今は水田が広がっているが、その昔は養老河岸の湿地帯であったと想われる。自然堤防の平地や右岸の国分寺台地とこの湿地帯を挟んだ反対側の大地には、畑木・海保から今富・宮原・引田・神代・分目といった集落が存在する。地域の人々は、海上農協や海上小学校が位置するこの台地を神代台という。県道姉崎・茂原線が、この台地を割って海上小学校前を通る。台地上からは、その昔は沼沢地であった千石耕地の現在の姿が眺望できる。広大な水田に突き出た台地の先端地が、海上小学校の校舎と校庭である。県道を挟んで反対側に、神代神社が忘れられたようにあるが、古社で三代実録に載る神社である。この神代台地と分目集落の舌状台地の谷は、水田になっている。もともと奥深い小さな谷であった。谷の奥は立野台地で、光風台・中高根と続いている。40年前までは、神代台から立野～光風台へと登るには、狭い山道しかなかった。谷の東側(現ゴルフ場内)には、袖ヶ浦との境界に位置する天羽田・深城～中高根～分目に至る鎌倉街道と推定される古道が存在していた。水田となっている現在の谷には、用水路が奥まで入っているが、かつては養老川の支流として大正時代の地図に記載されている。市原郡誌の「市原郡地質図」にも、養老川の支流として描かれている。たぶん沼沢(千石耕地)のど真ん中を通り、古養老河とは接続していたのだろう。米作りが始まったのは、神代台のような小さな谷からにちがいない。支流は千石耕地の用水路として、その機能を果たしている。分目要害城は、この小さな谷を挟んで神代台と向き合っている。この支流はかつての分目要害城の堀の役割を担っていたにちがいない。そして沼沢地地域・養老河の対岸には、鎌倉公方の直臣で有力な御家人であった村上氏の城館があった地である。分目台地側には、「要害・寝小屋・東門・門前・雲内・」といった中世の城があったことを窺わせる小字名がみられる。発掘調査によって、15世紀中頃から16世紀初期、そして以降の16世紀後半の二期に分かれるとある。そして16世紀末頃に大規模な改築造がなされたとしている。(市原市文化財センター年報 分目要害遺跡より)分目要害城の地は、古養老河とその支流によって、水運の要所にもなっていたにちがいない。また鎌倉街道が近くを通っていたことから、中世のこの地域の交通の要であったと想像できる。一方神代の台地に沿って、「櫓断」といった小字名がある。よく分からないが「櫓」とは、宇源によると「そり。形箕の如く、雪中、又は泥土を行くもの」とある。泥田を連想させる。古老たちは、この谷の田は泥深いという。台地下の住宅は地盤が悪く、土台に杭を打っている家屋が多い。養老河の支流域であったことが分かる。

(2)神代神社と海上地域



神代神社

口だろうとも指摘されているようにも見える。後年になって、台地との上り下りの必要性で人工的に切ったともいえそうで、断定はとてもできそうもない形状である。また谷の反対側の分目要害城ように、「要害・寝小屋・東門・」とか「堀ノ内」といったような小字名もなく、「殿屋敷」という字名があるだけである。このようなことから、この地域の農民たちを統率していた小領主の居館があったと、推測した方が自然のような気がする。中世には、一つのまとまった小領主と農民勢力の集落地が、成立していたことは確かであろう。

江戸時代後期の「房総志料」(中村国香・旧夷隅郡長者町の名主・宝暦11年1761年から上総と安房二国を巡回してまとめたもの)には、神代を「カジロ」と読んでいるが、もともと祝詞(ノリト)で、「カミヤライ」と読むことができるともいっている。市原郡誌にも記しているように、貞観十年(868)に、従五位下を授けられている。さらに神代という地について、「里傳に云ふ、村は古来の神地にして、神代の神の座すより、初めて二十三戸存したる餘滴なりと、後大郷となる。中古新生権現堂等の諸村を分かつ、～」とある。さらに「～神代村にありて、大照大日雲貴神(オウヒルメムチノカミ・天照大神の別名)を祭る、土俗傳ふる所に由ば、景行天皇四十年日本武尊東征の親察する所に係わると、唯憑據故ふ可からず、故神祇官史生立野良道職する所の社記を掲げてその縁由を示す」とある。江戸時代後期、地元の引田出身の国学者立野良道が、神代神社の由来を調べ上げたのである。祭神といい日本武尊東征の話、清和・陽成・光孝天皇の時代の史書(三代実録、延喜元年)に、従五位を授けられたとあることから神代神社は、姉崎神社から分かれたものにはちがいないと思っている。姉崎神社の社伝に、「景行天皇四十年日本武尊東征の時に初めて祀る所」とあるのは、神代神社と同じである。郡衙の役人となった海上国造の後裔の誰かが、祭主を務めたのであろう。郡衙の小折(郡)が地方行政の拠点となり、養老河流域の農耕儀礼として不可

分の太陽祭祀となったと推測できるのである。古代のこの台地は、上総国海上郡の日の祭りの中心地であったかもしれないのだ。その儀礼は、朝廷から発せられたものであろう。三代実録にあるように神代神社は、古代の神社としては格式が高く、高滝神社とは同格なのだが、今はどこの田舎にあるような、忘れられた小さな社である。

続日本書紀の記事に、「海上国造、池田日奉直徳刀白、外従五位下」を授けるとある。「日奉(ヒマツリ)とは、天皇の行う農耕儀礼であり、太陽神の祭祀にかかわる朝廷から下された祭官である。時代的にもここでいう日の祭は、郡衙のあったとされる小折と向き合っている台地の神代神社しかないのだ。神代神社の社は南向きで、小さい谷は田となっている。どこにもある字名であるが、ちなみに「本郷」という字名がある。広辞苑には、「郡司の庁のあったところ、ある郷の一部で最初に開けた付近の発展基礎となった土地。もとむら・・・」とある。古代からの里伝から、後年小字名として残ったのだろうか。その東隣は分目台地で、浅間神社があり下方を「堂谷」という。下位の地は小字名「馬込・下馬込・小馬込」が残っている。何か放牧を想わせる。神代台から光風台へと登る道を立野通りというように、立野の台地上の道は、中高根・袖ヶ浦の台地と続く。

「野」とは、現代人の感覚でいうところの野原ではなく、上総国大野郷(現養老溪谷方面)や越前大野といわれるように、人間がなかなか踏み込めないような山林地域という意味であつたらしい。大阪の大と同じように、「大」は美称である。

(3)村の原風景について

市原市の都市化は、高度成長期に海岸の埋め立てによる工業地域の出現による。工場働く人々の人口増と、宅地開発である。海岸地域から距離をおく地域でも、経済発展による生活の変貌で団地が出現したが、これまで通り村落という環境形態は残しながら、私たちの居住地域を形成している。そして町会という単位を担いながら、存続している。海上地域のこと、そして分目要害城址について触れながら原稿を書いているうちに、今現在生きている分目集落のことを、改めて考えてみようと思うようになった。この衝動は、どこからきたのかだろうか。まだ深くは考えてもなく整理もできていないので、ここでは表面的な感想的なものである。いつかは一つのテーマとして語りたい。考えてみると市原市の集落は、取り囲む環境のみならず精神的文化が、実に昔のままに溶け込んで定着しているのである。この集落の原風景は、どこからきているのか考えたくなってきたといってもよい。この地域一帯を今でも海上地区と呼ばれるのは、かつての村名である海上村があつたからである。

明治二十二年(1889)四月一日の町制施行に伴ない、「分目村・新生村・浅井小向村・権現堂村・糸久村・引田村・神代村・今富村・宮原村・西野村・十五沢村・小折村・柳原村・安須村・高坂村」の十五村が合併し、市原郡海上村が発足した。村名は、かつて存在した上総国海上郡に由来して

いるのだ。この村役場は、神代台の現市原市農協海上支店と同じ場所にあった。何か昔から神代台が、この地域の根拠地であったことを、暗示しているようでもある。現在の今富の集落には、海上八幡宮がある。神代台には海上小学校があり、「海上」の名称はかろうじて残っている。明治期の合併以前の村は、ほとんど江戸時代の村単位と同じであり、現在も町会の単位ともなっている。大字区画図をみると一目瞭然、市内でもこんなに細かい集落単位はないのだ。この原点は、どこからきているのだろうか。

小田原北条氏の滅亡と共に、中世の上総国はその姿を消した。豊臣の武将浅野長政や徳川方の本多忠勝によって、房総の地はことごとく豊臣秀吉により一掃され、徳川家康の関東入部と共に、徳川の所領となったのだ。そして天正十九年(1591)に、下総・上総で検地が施行された。いわゆる太閤検地である。三年後の文禄三年(1594)に、海上地域に検地が入った。

「上総国海保郡分目之郷御縄打水帳」(文禄三年甲午七月十日)に、その記録が残っている。郡を徹底した小さい区画にして、支配管理しやすい村を誕生させた。これを「村切り」といった。そして、すべて旗本の給地とした。分目郷は、二十五戸の村として記録されている。検地以前の中世では、農村の耕作者の実態までは捕らえられていなかったし、その必要性もなかった。地侍や在地領主たちである名主は、小作料として一部を得分として得て、その小作料の一部を租税(年貢)として納入している。その地域の小領主や地侍と農民との繋がり、緊密であったろうし、ある契約のもとに成り立っていた社会構成による支配構造であったとあってよい。それは財力と勢力のある小領主や地侍たちが、地域ごとを支配する構造が積み上がって、さらに地域圏を造りあげていった社会であったとあってよい。勢力圏の接せる処では、当然軍事衝突が発生する。

検地と刀狩によって、戦乱はなくなり平和になったが、引き換えに土地に従属することになったとあってよい。農民を検地帳に登録し、耕作する個々の経営を法的に確立させ、集団に所属する土地を区画したのだ。これが検地後の村である。年貢を納める農民と其の仕組みを管理しやすいように、広域の郷から小さく区切った行政単位(村切り)にした。「御検地帳屋敷帳」というものがあるように、宅地まで明記させられ、移転の自由もなくなったのである。太閤検地は、中世の郷を解体し、農民や地侍・小領主の所持する耕地によって成り立つ単位の村にしようとしたものである。天保14年(1843)、9月の「分目村明細帳」が残っている。そこには、文禄3年の検地条目第八条に、「村切り、榜示(ぼうじ)を立て、入組これなき様に相定すべし」とある。海上村以前の各村は、検地によって出現した村と一致している。現在は町会名とも同じになっている。まさに検地によって生まれた村単位の組織が、まだ機能しているということである。各町会には、それぞれの神社と寺があることは、日常生活の中で実感している。江戸時代、寺請制度によって村の農民であることを証明する寺である。村の者は、檀家として登録される。また神社を、農民の精神の拠り所とした。こ

の地域が最も激しい村切りにあったと想われるが、それは中世までの歴史の特異性からくるのであろうか。いまのところ、そうだとと言える明確な根拠もないでいる。

三代実録にある従五位下の神代神社と、高滝神社とは同格である。同じように従五位を授かるとある。高滝神社の社殿は、享保十二年(1727)に建立した社殿は、本殿・幣殿・拝殿より成り立つ権現造りで、立派な佇まいで市の指定文化財にも指定されている。神代神社は、小さな鳥居のある目立たない、粗末な田舎の神社である。あまりにも違いがあるのは、どこからきているのだろうか。

分目集落の現在の戸数は、五十四戸である。文禄三年の(1594)の検地では、二十五戸である。四百十八年間でのその増加は、たった二十九戸である。このことは色濃くその精神文化を残していることを、分目町会の住民として肌で感じることでところである。



海保～今富～神代台から分目



千石耕地を中心とした全景



分目要害城址